

災間

スタディーズ

震災30年目の
“分有”をさぐる

【#2】 デイスクッション

記録を集め、受け渡す

2024.9.28 [土] 14:00-17:00

デザイン・クリエイティブセンター神戸 | 2階 ギャラリーC

ゲスト —— 佐々木和子 [震災・まちのアーカイブ会員、神戸大学人文学研究科学術研究員]

聞き手 —— 佐藤李青、高森順子、宮本匠 (災間文化研究会)

参加費：無料 / 定員：30名 (要事前申込)

申込：ウェブサイト (<https://kiito.jp/>) よりお申し込みください

主催：デザイン・クリエイティブセンター神戸、災間文化研究会、阪神大震災を記録しつづける会
助成：JR西日本あんしん社会財団、ひょうご安全の日推進助成事業

KIITO:

【#2】ディスカッション「記録を集め、受け渡す」

官民双方の立場から被災記録の収集、保存、活用に尽力してきた佐々木和子さん。行政の立場では兵庫県の資料収集事業(のちに「人と防災未来センター」に移管)に携わり、民間の立場では、神戸市長田区「震災・まちのアーカイブ」での資料収集、保存、活用に携わってこられました。佐々木さんは「震災資料とはなにか」と問われたとき、「震災に関わるものは何でも」と答えます。これは、佐々木さんが関わってきた活動に共通する理念だといいます。第2回ディスカッションでは、佐々木さんの約30年にわたる取り組みを振り返りながら、活動するなかでどのような記録や人びとの出会いがあったのか、「記録を集め、受け渡す」ことの切実さについて、災間文化研究会とともに考えます。

ゲストプロフィール

佐々木和子

震災・まちのアーカイブ会員
神戸大学人文学研究科学術研究員

1996年12月から2002年3月まで兵庫県による震災資料収集・保存活動に嘱託として従事。1998年3月震災・まちのアーカイブ設立にかかわり、現在活動中。その間、研究員、ボランティアとして、阪神・淡路大震災にはじまる震災資料収集・保存に取り組む。



©神戸新聞社



上・震災・まちのアーカイブ外観(2017)
下・震災・まちのアーカイブ発行「瓦版なます」

関連プログラム

■ **分有資料室** 2025年3月30日(日)まで/2Fライブラリにて
災害にかかわる記録や表現を見る、読む、書くことができるスペース。「災間」と「分有」をキーワードに集めた記録・表現の書棚「分有と表現のライブラリ」、関連プログラム「30年目の手記」を書くためのスペース、1995年から現在までの災害や社会にかかわる出来事を追うための「1995-2025 timeline」、1995年から震災手記集を出版してきた「阪神大震災を記録しつづける会」に関する資料展示で構成されています。



■ 阪神・淡路大震災から「30年目の手記」

阪神・淡路大震災にまつわる手記を募集します。お寄せいただくエピソードは、震災当時に限ったものではありません。震災から30年のあいだにあったことや感じたことなど、誰かと分かちあいたいエピソードをお書きください。

募集期間：2024年1月17日(水)～12月17日(火)

募集期間中にいただいた手記は、期間中に一部公開、終了後に原則全文公開を予定しています。また、「阪神大震災を記録しつづける会」手記執筆者とともに集まった手記を読む「30年目の手記公開ミーティング」を分有資料室にて行う予定です。

主催：デザイン・クリエイティブセンター神戸、阪神大震災を記録しつづける会、災間文化研究会/協力：一般社団法人NOOK、神戸市立図書館/後援：神戸新聞社、NHK神戸放送局、NHKエンタープライズ近畿



主催団体について

災間文化研究会

さまざまな災厄の間(あいだ/なか)を生きているという「災間(さいかん)」の視点に立ち、社会を生き抜く術としての文化的な営みに目を凝らし、耳を傾ける試みを行うグループ。メンバーは佐藤李青(アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー)、高森順子(情報科学芸術大学院大学 研究員、阪神大震災を記録しつづける会)、宮本匠(大阪大学大学院人間科学研究科 准教授)、小川智紀(認定NPO法人STスポット横浜 理事長)、田中真実(認定NPO法人STスポット横浜 事務局長)。それぞれ異なるテーマをもって活動し、災間の社会における「間」で動くメディアとしてのふるまいを模索している。2023年5月、記憶を(分有)する表現にまつわるメールマガジン「分有通信」発行。bun-tsu編集部には編集者の辻並麻由が参加。

▶ <https://researchmap.jp/community-inf/Saikan-Studies>

阪神大震災を記録しつづける会

阪神・淡路大震災の体験手記を集め、出版する市民団体。阪神・淡路大震災の約1ヶ月後の1995年2月中旬より、神戸で印刷業を営んでいた高森一徳を発起人として活動をはじめ、1995年5月に最初の手記集『阪神大震災 被災した私たちの記録』を出版。手記集の出版は、約1年に1度のペースでおよそ10年にわたって続いた。10巻までの投稿総数は1,134編。10巻の脱稿後の2004年12月に一徳が急逝し、約5年間の活動休止を経て、2010年に一徳の姪である高森順子が事務局長となり活動を再開した。震災から20年目の2015年には10年ぶりの手記集を出版。25年目の2020年には、これまでの執筆者へのインタビューを収録した記録集を出版し、現在まで活動を続けている。

▶ <https://hanshinkiroku.tumblr.com/>

お問い合わせ：デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO)
〒651-0082 神戸市中央区小野浜町1-4
TEL: 078-325-2235 FAX: 078-325-2230
E-MAIL: info@kiito.jp WEB: <https://kiito.jp/>



災間 スタディーズ

震災30年目の
“分有”をさぐる

1995年以降、地震、風水害、コロナ禍など、いくつもの災害が発生してきました。私たちは、すべての被災地の復旧や復興を見届け、共有することが困難な「災間」を生きています。過去の災害の記録や表現にもう一度光を当ててみることに。そこから、経験を想像し、分かちもつ「分有」の態度を探ること。阪神・淡路大震災から30年目を迎える今、ともに考えてみませんか。災間スタディーズでは、災厄をめぐって、アートやアーカイブの視点からリサーチを行うゲストを迎え、渦中に生きる人びとが生み出す記録や表現の力について考えます。